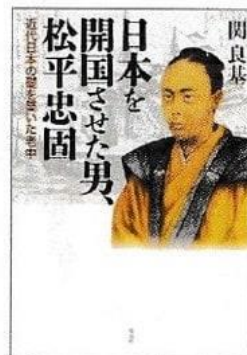


日本を開国させた男、松平忠固

本日のメインテーマ

松平忠固を 大河ドラマに！



日本を開国させた男、松平忠固

近代日本の礎を築いた老中

関 良基 著

松 平忠固なだかたといつても
よほどの歴史通で
はない限り知る人はまれ
だろう。上田藩6代目藩
主で、日米和親条約と日
米修好通商条約締結時の
老中だが、明治政府が不
平等条約を近代化によつ
て改正したという薩長中
心の維新史の中、長らく
忘れ去られてきた。
本書は忠固の未刊行の
日記など第一級の資料を

作品社
2200円＋税

用い、これまでの不平等
条約史観の見直しを迫る
ノンフィクション。
ペリー来航時、忠固は
徳川斉昭と対立した開国
派の支柱であったこと、
日米修好通商条約は輸入
品への関税で当時の国際
水準を確保し非西欧諸国
が結んだ条約の中では最
良のものであったこと、
不平等条約となったのは
攘夷派のテロの結果であ
ること、また、生糸が日本
の代表的な輸産品に成
長するうえで忠固が上田
藩主として多大な貢献を
したこと等々が語られる。
歴史を知る醍醐味が味
わえる一冊となっている。

松平忠固はどんな顔だった？



実兄・三宅康直



松平忠固？



3男松平忠礼
(家督相続)



4男忠厚(米国
初の日本人発
明家)



孫のキンジロー・マ
ツダイラ
米国初日系人市長

松平忠固は大河ドラマの主役にふさわしい 三度の失脚を乗り越えたドラマティックな生涯

【1】蛮社の獄：水野忠邦批判を展開 ㊦ 寺社奉行失脚

㊦ 水野忠邦失脚 ㊦ 復活・大坂城代就任

【2】日米和親条約交渉：開国を唱え攘夷派の徳川齊昭と対立。

㊦ 条約は締結させたが、齊昭に疎まれ翌年に失脚。

【3】日米修好通商条約交渉：

アメリカとの条約交渉で老中復活。次席老中・勝手掛就任。

㊦ 井伊直弼と対立。

㊦ 天皇の政治利用に反対し、無勅許での調印を断行。

㊦ 調印4日後に責任を取らされ失脚。

【4】上田の生糸の輸出を準備。開港の成功を見届け、死去。

松平忠固の事績を明らかにすれば、「幕末史」の定説は覆る

× 日米和親条約の段階では、薪水・食料の供与のみで、交易に踏みこまないことは規定路線だった。

○ 松平忠優(忠固)は、閣議をリードし、いったんは3~5年後の交易開始の合意を得ていた。

× 改革派の一橋派の前に立ちふさがったのが、井伊直弼や松平忠固らの保守・佐幕の南紀派であった。

○ 忠固は南紀派ではない。忠固と井伊は不仲。一橋派こそ、国際情勢に無知な攘夷派や公卿を勢いづかせ、日本を混乱させた。

× 日米修好通商条約は、大老・井伊直弼が列強の圧力に屈する形で、勅許のないまま結ばされた「不平等条約」であった。

○ 条約の調印を断行したのは井伊直弼ではなく松平忠固。忠固は主体的な意志で交易で国を富まそうと開国した。日本に関税自主権はあった。

(1)なぜ忠優(忠固)は交易論者になったのか？

天保の大飢饉の後の忠優の訓示：

- 領内の気候を考えれば凶作はこの三年のみにではでないだろう。米作だけに頼るのは危険だ。山野に少しでも開発の余地あれば、開墾して桑樹を栽え、おおいに養蚕業を振興せよ。

👉 稲作中心の自給経済の脆弱性を認識。

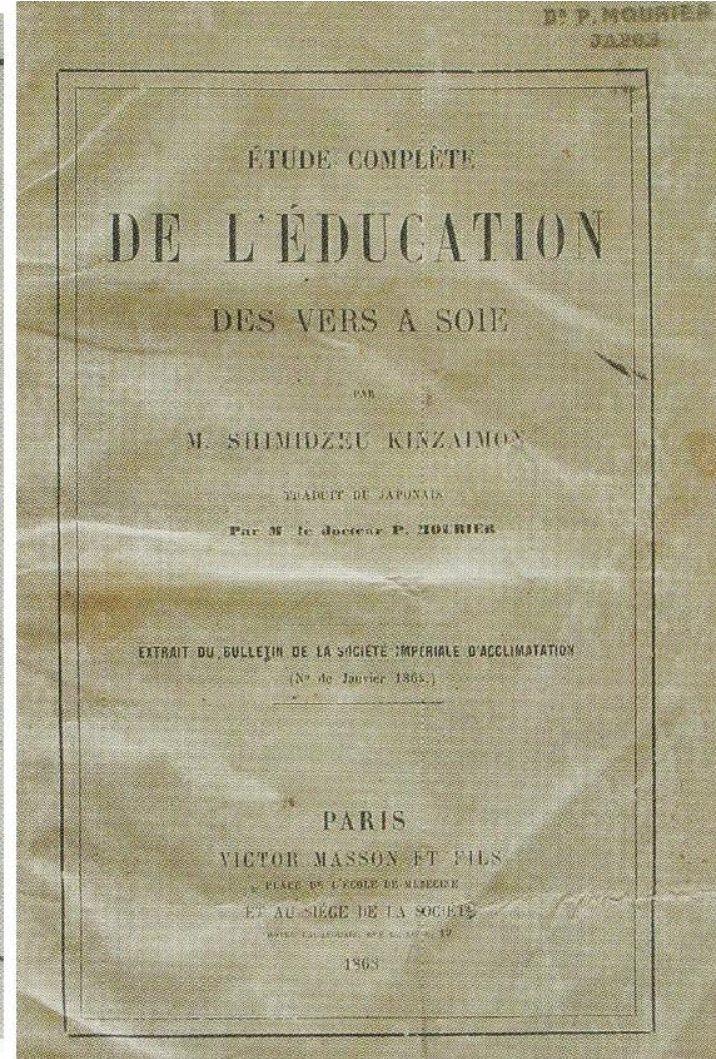
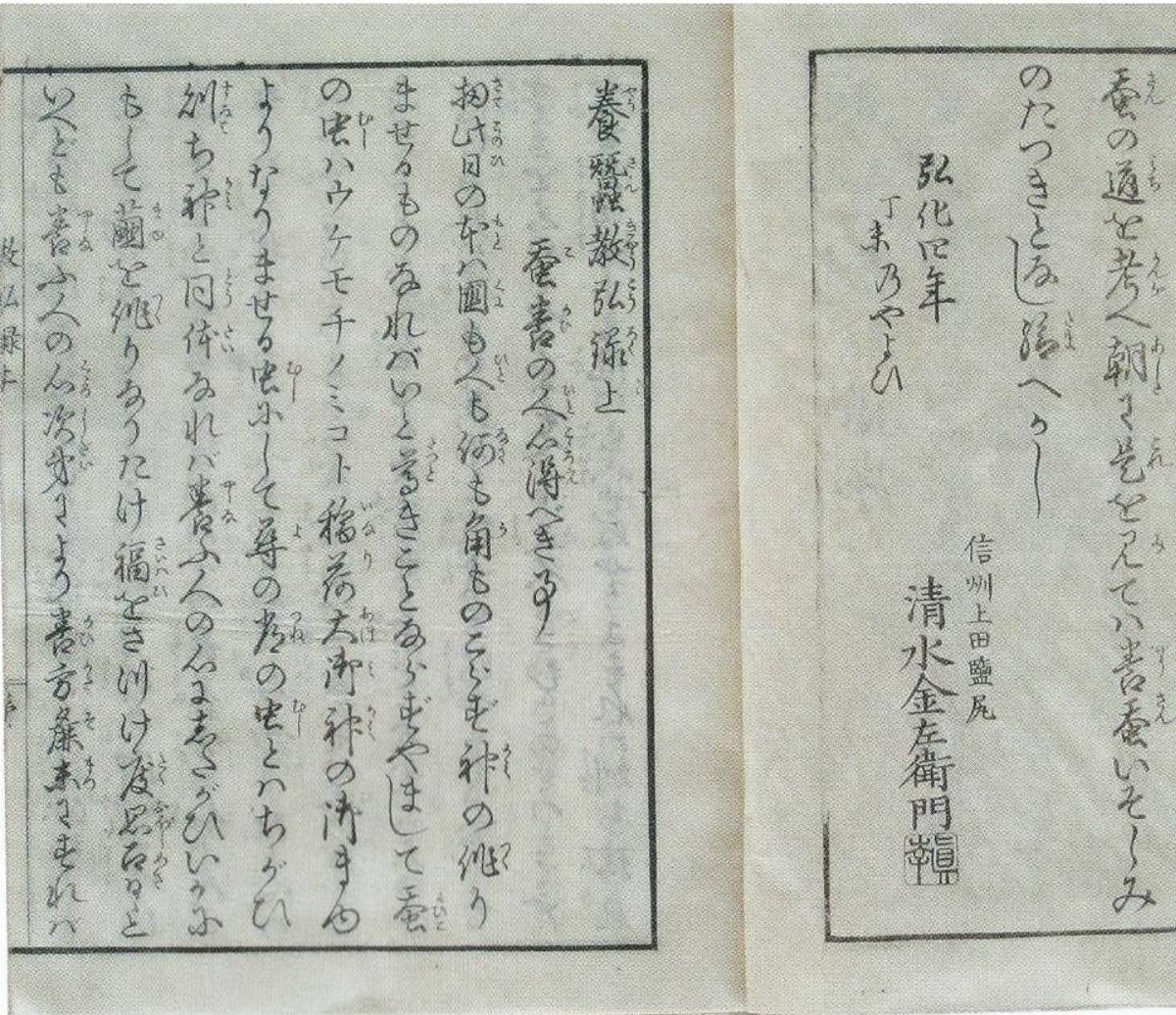
👉 上田に産物会所を設置。粗悪品を排除して、品質を管理し、上田縞を藩専売としてブランド力を高める。

👉 大坂城代に就任すると、難波に上田織物の直営店を開設。大坂の庶民は「御城代縞」と呼んで歓迎。



上田の生糸・織物の販路拡大策の延長上に国際市場が位置づけられた？

弘化年間に上田で出版された『養蚕教弘録』 明治元年にフランスの学術誌が翻訳





黄金生 ♂
(春蚕)



又昔 ♀
(夏蚕)



け合わせて品種改良の工夫をした。藤本善右衛門(保右)が、野生の蚕と掛け合わせた新品種「黄金生」は、天保飢饉頃の低温期に最適で好評を得た。その子善右衛門(繩葛)の掛合種「信州かなす」も広く知られた。

世界から認められた日本の生糸の品質の高さ

日本は茶と絹の双方において、本国市場に供給したとき、中国製品と競争して、なお有利な品質と価格で供給し得るといことがはっきり確認できた。……かなり上質の絹の中には、一ポンド四シリングの値がつくものもあって、中国の最上等のものよりも高く売れたのだ。

Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, Vol. 1, Greenwood Press Publishers, p.374.



イギリス公使 オールコック

今年日本から輸出される蚕種の量を今日以降50万枚にきめることができた。……(フランス本国の)養蚕諸県の需要に応じるのに必要な蚕卵紙の量を養蚕家に引き渡すことができるであろう。……恐るべき天災が除かれるであろう。……日本政府の贈物は私には測り知れないように思われる。

(フランス公使レオン・ロッシュの本国宛書簡 石井孝『増訂 明治維新の国際的環境』吉川弘文館、1966年、645～646頁)



フランス公使 ロッシュ

(2) 日米和親条約交渉と忠優

- ◆ 条約交渉の最中の嘉永7年2月の月番老中は忠優。交渉実務のリーダーだった。

2月1日：応接所を浦賀から横浜に変更する通達。

横浜警護を小倉藩と松代藩に命じる通達。

- 2月2日：交渉担当の林復斎と井戸覚弘に、「徳川斉昭に報告せず、内密に条約交渉をまとめよ」という極秘指令。

👉 誰かが徳川斉昭に密告？ 👉 斉昭激怒

- ◆ 2月4日の城中評議で忠優と徳川斉昭が激論。忠優が斉昭をやり込め、5年後の交易承認と結論。
- 「伊賀守は和議を唱えるばかりであった。(中略)夜五ツ時(夜八時)くらいまで城内でねばったが、評議は全く振るうことなく、切齒して悔しがるのみであった」(『水戸藩史料』斉昭手記)。
- みな意見は姑息な交易の説に傾き、一時は林復斎に交易許可の内達が出されたそうだが……五年後の交易開始で先方が承知しなかった場合は、三年後とするという線で定まったそうだ(『水戸藩史料』)

交易通商をめぐる斉昭vs忠優

◆ 徳川斉昭は交易許可の決定に激怒。海防参与辞職をチラつかせて阿部正弘に交易不許可を訴える。

👉 斉昭に忬度した阿部正弘が、老中首座の権限で交易の決定を覆す。

👉 忠優は、最後の手段として徳川家定に直訴。家定は動かず。



交易抜きのと親条約に。

◆ 翌安政2年、アメリカ領事の下田駐在を巡って斉昭と忠優が対立
斉昭「アメリカ領事の下田駐在を許せば下田は皆キリスト教徒になる」

忠優「下田の住民がキリスト教徒になっても大した問題ではない」

👉 斉昭激怒。👉 阿部正弘に忠優解任を要求。



忠優は同僚の松平乗全と共に失脚(安政2年の政変)

(3) 忠固南紀派説は誤り

忠固は井伊直弼と懇意で、井伊など溜間大名の後押しで老中になった。当然「南紀派」。井伊を大老にする工作を行ったのも忠固とされてきた。

👉 虚構

- ◆ 忠優改め忠固の復活、老中再任のバックアップをしたのはおそらく大奥。
- ◆ 忠固が老中に再任されたとき、井伊直弼は「祝儀」と称して黄金三〇枚を贈る。忠固は受け取りを拒否。井伊に借りをつくらぬよう細心の注意をしていた。(『昨夢紀事』)
- ◆ 堀田正睦談「もともと忠固と井伊直弼は不仲なのだ」(『昨夢紀事』)
- ◆ 井伊は大老に就任すると松平忠固の更迭を将軍・家定に要求。
- 家定「備中(堀田)と違って、伊賀(忠固)は大奥の評判が大変に良いから、更迭することはできない」と回答 (彦根藩『史料公用方秘録』)

忠固の真意： 中立→一橋→南紀

- 安政4年のあいだ、忠固は条約に専念し、将軍継嗣問題では中立であった。
- 安政5年に入って慶永の説得を受け一橋支持の立場で、家定と大奥の説得に努めた。
- 家定は一時的に忠固の説得を受け入れたが、大奥の反対を覆せなかった。忠固は大奥に敗北。
- 忠固は、天皇を政治利用しようとする一橋派の動きには危うさも感じていた。一橋派が過激化し、「将軍廃立」まで口にするようになったことによって、忠固は激怒し、一橋派から離れた。

(4) 条約調印を断行したのは松平忠固

□井伊直弼の言葉(現代語訳)

「私(井伊)は、『朝廷の考えを最優先にすべき』と主張したが、**伊賀守**が、『公卿の望みなど、いちいち聞いていたらきりがない。そのようなことをすれば**政権の権威も失い**、開国の好機を逃し、**天下の大事を見失う**ことになる』と主張したのだ。伊賀守などは小大名の分際で、権勢をふるって傍若無人にふるまいおって、この度も自分の思うがままに任せて、京都を圧倒しようなど、言語同断である」(中根雪江『昨夢紀事』第四、192頁)



彦根藩主 大老
井伊直弼

反対する井伊を押し切って、忠固が強引に調印したと井伊本人の談。開国の決断をしたのは松平忠固。

ペリー来航当時から交易通信を求め、攘夷論と
闘っていた老中・松平忠固
(開港1年前に家臣たちに語っていた言葉)

交易は世界の普遍的な道である。決して嫌がって避けようとするべきものではない。むしろそれを活発にすることこそ緊要である。すなわち皇国の前途は、交易によって開かれ、おおいに興隆を図るべきものなのだ。それ故、わが藩も、今からその準備をせねばならない。たとえ世論が紛糾しようとも、開かれるべき道を閉ざしてしまふことなど、できるわけがない。皆の者は世論の喧騒にひるむことなく、交易を推進する方法を考えていかねばならない。

(小林雄吾『松平忠固公』(上田郷友会月報、大正4年)

(5) 忠固最後の大事業

- 上田藩産物世話役伊藤林之助日記(安政6年3月4)
浅草の上田藩邸に到着し「御上様より御料理頂戴」
- 中居屋重兵衛日記
- 安政6年1月21日、上田産物会所と「貿易ノ儀」について交渉
- 2月7日、上田藩邸に招かれ「山海の珍味を取りそろえた御馳走」で接待を受ける。
- 3月5日には「伊賀守様方御進達」。上田藩の物産を中居屋が扱い横浜から輸出する許可。
- 3月17日「明七つ時、吉岡様参り、それより伊賀守様、より村垣様、それより岩瀬様江参り帰り」
- 3月18日「松平伊賀守様御勘定奉行松本様御出御国産書御持参御酒出す」
- 伊藤林之助日記6月19日「一九日朝店開之節イギリス人参り、おおいに噺相分り上座品々見せ申し候」

横浜開港を見届けて死去。

ネットのオークションで忠固の古文書が相次いで流出：
本野敦彦氏と私でひとつ購入



御礼状令披見候、

公方様益御機嫌能

被成御座候旨、脇坂中務太輔

其表通行披相伺之、目出度

被存由得其意候、紙面之趣

文八一覽之事候、恐々謹言

松平伊賀守

十一月廿一日 忠固(花押)

加藤越中守殿